

(3) 読書・映画・音楽

政治運動の波は一高学生寮にも押し寄せていたが、丸山はそれとは一線を画し、学生時代を満喫していた。高校入学とともに岩波文庫を手にとり、『罪と罰』『クオ・ヴァディス』などを面白く読んだという。『万葉集』、若山牧水、島崎藤村、北村透谷の歌集を枕頭の書とし、吉川英治の『鳴門秘帖』や白井喬二の『富士に立つ影』などの大衆文学にも親しんでいた。

しかし、高校時代の丸山は「文学少年」というより「映画少年」だった。外国語の勉強という建前で洋画のトーキー作品を見あさった。『巴里祭』『制服の処女』『会議は踊る』『自由を我等に』『地獄の天使』など、今でも映画祭で上映されるような傑作に触れたのはこの時期である。マレーネ・ディートリッヒを巋の女優とし、一中卒業生の同人誌『四平会会誌』創刊号に「ディートリッヒを語る」という一文を寄せている。

熱烈な映画少年だった丸山が意識せざるを得なかったのが、当局による検閲だった。『西部戦線異状なし』（画像）や『戦艦ポチョムキン』『三文オペラ』などは検閲によってフィルムがカットされた状態で上映されていた。このことは逆に、カットされた部分への関心を高めることになった。たとえば『西部戦線異状なし』の場合、海外研修先でノーカット版を観た級友の感想からカットされた箇所を知り、そのシー



ンに興味を寄せている。また、左派的な傾向を帯びた「傾向映画」にも触れており、特にソ連映画とワイマール期のドイツ映画には高い芸術性を感じた。ほぼノーカットで上映されたソ連映画の傑作『人生案内』（1931年）を有楽町の「邦楽座」で観た際の出来事を、丸山は次のように回想している。

幻灯字幕のなかに、「ソ連邦には一人の浮浪児あらしめてはならぬ——レーニン」という文字が写し出されたとき、真暗な観客席のそこここからパチパチと拍手が起ったのは、まことに印象的だった。むろん臨監の警官も後方のきまった席にいたにはちがいないが、何しろ闇の中なので誰が拍手したかは見分けがつかない。また、それを狙っての意識的な拍手であった。これも現代では想像も困難な戦前の精神的空気を伝える小さなエピソードといえよう。（丸山眞男「映画とわたくし」）

丸山は政治運動とは距離を置きつつも、芸術作品にあらわれた「抵抗」の精神と、それを抑圧する政治権力を二つながらに意識せざるを得なかったのである。

一高での寮生活は音楽の趣味も変化させた。中学校時代は「君恋し」「波浮の歌」などの歌謡曲を好んでいた丸山だったが、一高に数多いた「クラキチ」（＝クラシック狂い）の影響を受けて、クラシックを聴きはじめるようになった。丸山のクラシック趣味は生来の鳴り物好きと旧制高校的教養主義の混合物といえよう。筋金入りの「クラキチ」だった小山忠恕にならい、楽譜を手にしながらか聴くのが常であったという。

丸山の洋楽趣味は、兄鐵雄の影響で「ハモニカから入った」点が独特である。同世代や下の世代は「旧制高校のスノビズムと洋楽が結びついて」おり、「だいたいにおいて高級な

ものに最初から入」るなか、丸山はまずポピュラーなものに触れていた。丸山はそれが「非常によかったと思う」と回顧している。

兄貴の影響で、非常にポピュラーなもの、「森の鍛冶屋」とか海軍軍楽隊とか、武蔵野館の休憩時間に流れる有名な「カルメン前奏曲」とか、そういうのばかり。なかなかベートーヴェンまで行かない。非常に手間がかかった。無理にわかろうとしないから、よかったです。 (『定本 丸山眞男回顧談』上)